地域創造学部・卒業制作　最終説明書

（1）卒業制作のタイトル

大正建築図録　－リノベカフェから生まれる新たな価値－

（2）学籍番号・氏名

19jj032・神野みく

（3）担当教員名

田中正人

（4）共同制作者の氏名（共同制作のみ）

（5）提出する制作物のリスト

・Web サイト　https://clematis12.sakura.ne.jp/taisyo/

・小論文　地域と生きる大正リノベーションカフェ

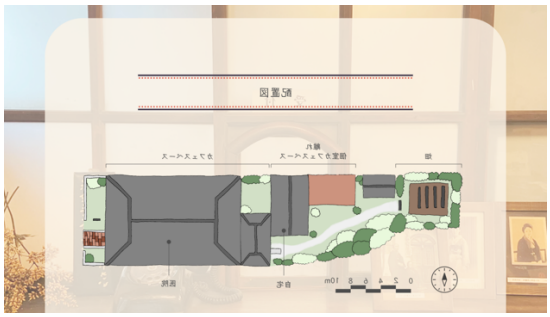
（6）制作物の写真（全て）

[Web サイト]

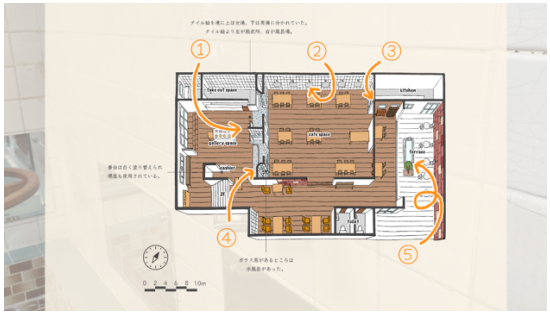
トップページ

rojica

旧中川邸



嵯峨野湯



（7）制作物の発信方法

自身の所持しているサーバーでサイトを公開する。
学部展示会への出展、許可が得られれば、田中正人研究室の Web サイト、地域創造学部の Web サイトにもリンクを貼る。

（8）自分の役割と貢献したこと（※共同制作のみ、200 字以上、各自が記入）

（9）制作のコンセプト・概要・目的・全体を貫く考え方など※3,000 字×人数以上

以下小論文添付（8,872 字）

地域と生きる
大正リノベーションカフェ

神野みく

本研究は、役目を終えた大正時代の建物がカフェへとリノベーションされることで新しい価値が生み出される背景やプロセスを把握し、それを自身の制作する Web サイトで表現するものである。

1. 役目を終えた公共・公益的施設の実態

現在日本では人口の減少と高齢化により空き家の数が増え続けている。中でも工場や銭湯、学校といった公共・公益的施設は、その役目を終えると再活用されることはなく、放置あるいは取り壊しが行われてきた。

総務省の平成 25 年公共施設等の解体撤去事業に関する調査結果によると、地方公共団体が保有する公共施設のうち解体撤去の意向がある施設は、全国で 12,251 件、その中で現在使用されていない施設の数は 5,756 件(47%)にも及ぶ。また、全体のうち 5,007 件(40.9%)は解体撤去時期が未定であり、解体撤去後の跡地利用計画の有無についても 8,762 件(72%)が未定のままである[総務省, 2013]。

人口減少に伴い、施設の利用需要も減少していることから、今後新しく建設される公共・公益的施設は今までよりも少なくなっていくことが予想される。

2.　大正時代の建築デザイン

大正時代の建築物は他の時代とは異なる特色を持っている。この時代を象徴する建築物を挙げるとすると、東京駅、旧帝国ホテルが有名である。一見して、この 2 つの建物に共通するのは、大正以前の日本には見られなかったデザインということである。それまでの日本は木造建築が主流で畳に障子、引き戸がトレードマークであったが、大正時代では西洋の建築、文化が取り入れられ、今までにない外観や間取り、洋風の家具が広まった。特にレンガ造りであることは大きな特徴といえる。

これらには、大正 3 年(1914 年)からの第 1 次世界大戦に伴う好景気により、工業化が各地で進み、都市が発達していったという背景が関係している。また、海外からの新たな知識の流入により、都市部を中心に生活様式が大きく変化していった。住宅では、玄関横に洋風の応接間を備えた文化住宅が広まり、食卓には洋食が並ぶようになった[渡辺光雄・高阪謙次他,1982]。

そして西洋文化がさらに加速した背景として、大正 12 年(1923 年)に起こった関東大震災がある。大正時代は西洋文化の影響を受けてモダンガールが登場したが、これに拍車をかけたのは関東大震災後からである。簡単服とも呼ばれた“アッパッパ”は、袖が短く裾の開いた女性の夏用ワンピースのことである。それまで一般に着られた和服に比べて、着やすく動きやすいこと、空気を通しやすく涼しいことが特徴であり、瞬く間に広まっていった[市原俊介,2010]。

3.　文化伝承の場としてのカフェ

大正時代は 15 年間と日本で最も短い時代であり、この時代に建設された建造物は当時の文化や歴史を知る上で重要な手がかりとなっていく

であろう。そのためそれらの建造物は、歴史的背景を伝えるひとつの貴重な財産として保存され、残されていくべきである。歴史や文化は若い世代が当時のことに関心を持ち、次世代へ伝承していかなければ忘れ去られる。したがって実際の建造物へ立ち寄ってもらうことが関心を持ってもらうきっかけとなる。

だとすれば、まずは立ち寄るための動機づけが必要である。そこで本研究ではカフェに注目する。カフェが気軽に立ち寄れる場として認識されていることは、次のような調査結果からもわかる。普段カフェを利用する 698 人を対象とした、株式会社クロス・マーケティングの調査によれば、全体の約 4 割(40.7%)が“ゆっくりリラックスするためにカフェを利用する”と回答し、食事目的よりも多い結果となった。また、カフェを選ぶ時重視することでは、“店内の雰囲気が落ち着いている”という回答が 34.2%で最も多く、カフェに落ち着いた空間を求める人が多いことがわかる[クロス・マーケティング,2021]。これらのデータからカフェは何かを目的に利用するというよりも、何気ない時に立ち寄れる場所として利用されることが多いことがわかる。

このように、カフェは多くの人にとって立ち寄りやすい場として認識されており、すなわち建造物に触れる機会を生み出す場になり得る。

5. リノベーションカフェの事例

さて、リノベーションによって再生された建物は増えつつある一方で、工場や銭湯といった施設はその役目を終えると再活用されることが少ない。近年では元ある建物を活かしたリノベーションカフェが増えつつあるが、カフェにリノベーションされたことで創出された新たな価値というものを明らかにしなければならない。

未利用となった公共・公益的施設のリノベーションは各地で展開されているが、その先駆けとして廃校カフェが懐かしさを感じられることから話題となった。山口県宇部市東吉部地区にある“職員室カフェ”は廃校になった小学校の職員室をカフェに改装し、注目を集めている。ここでは、給食をモチーフに銀色食器で食事が提供され、机や椅子も当時のものを使っており、お客さんの多くはSNSの投稿を見て訪れている。この地域には観光名所や商業施設がないため、カフェを開き、自分たちで地域の魅力を作っていくという姿勢が印象的である[村野哲郎, 2020]。

このような地域活性化を目的としたカフェはほかにもある。群馬県富岡市にある“珈琲焙煎所　月とゆふづつ”は東京から夫婦で移り住んだ西尾祐諄さんが経営するカフェである。元々農業用倉庫だった建物をリノベーションし、1階をカフェに、2階をゲストハウスに改装することで、それが地域の活性とリンクできればと夫婦は話す。コーヒー豆の焙煎は煙が出るため住宅地だと難しい。そんなときこの倉庫と出会い、やりたかったことを存分にできるこの場所でカフェの開業を決心した。富岡市は子どもが成人すると都会へ出て行き、戻ってこない家が多いという。夫婦は「何もないところには人は来ないけれど、一軒何かができれば次々と増えていきますから。」と話し、自分たちの店から地域を盛り上げたいという思いが強く感じられる[ナカヤマ,2020]。

このようにリノベーションカフェはその建物を残していく役割のほか、地域活性化を手助けする手段としても役立てられている。その中でも特に、大正時代の建物を再活用しているカフェにはその場所から伝えたい思いがより強いのではと考える。地域交流の場としてのカフェがあるように、一つの時代の文化や歴史を伝えていく場所としてのカフェもある

のではないかと感じる。

6.　研究の目的

本研究では、価値ある大正時代の建物、中でも施設としての役目を終えた建物が一部の人にしか認知されず、歴史や文化が薄れていくことで取り壊されるという問題に着目する。

文化を伝承し、大正時代の建物を保存していくには、当時のことを知る世代とそれを伝え、残していく次世代の両者が必要である。つまり、一つの世代だけが文化を残すために動いたとしても文化はその世代で途切れてしまうだろう。文化は世代を超えてそれぞれが継承に向けて働きかけなければならない。今回の研究では特に同世代、若者が文化を伝承するためのきっかけ作りとなる Web サイトを制作する。

文化を伝承し、大正時代の建物を保存していくには当時を知る世代のほか、若い世代の力が必要不可欠である。若い世代に文化を知ってもらう方法として最も身近にあるものが SNS である。今や SNS は生活の必需ツールとなっている。このことから自身の制作する Web サイトを通して少しでも多くの人に立ち寄りやすいとされるカフェの情報を届け、実際に訪れてもらったのち SNS に情報を投稿してもらう。これを連鎖させ多くの人に建物の存在を認知してもらうことでその建物が長く残される後押しになるのではと考える。

本制作はこの一連の流れを作り出す一つのツールとなることを目的とする。

制作前のフィールドワークでは、複数店舗へカフェを営むまでの経緯やこだわりについて取材をし、リノベーションカフェであるからこそ創

出される価値というものを見つけ、Web ページで表現する。これを見た人がリノベーションカフェや大正時代の文化に関心を持ち、実際に建物へ足を運ぶことで価値ある建造物が残されていく連鎖が生まれるのではないかと考える。

7.　研究の手順

研究の手順としては、まず始めに大正時代の文化や建築についてインターネットで調査をし、他の時代との違いを明らかにする。その後大正時代の建物をリノベーションしたカフェに取材交渉を行い、現地もしくはオンラインでリノベーション時の話やその経緯、カフェを通して伝えたいことなどを取材する。取材後、カフェの間取りを描き、まちの情報も合わせて掲載することでそのカフェがまちにどんな影響を与えているのかを明らかにする。

これらを制作したのち、それぞれのカフェの魅力と見つけた共通点をまとめ、一つの Web ページを制作する。また、Web ページとは別に、取材の全文と今後の展望を記す。

8.取材全文

rojica（大阪府泉南市）　2022.6.30

店主：中川さとしさん

01.なぜカフェを開こうと思ったのですか。

始めはカフェを開く予定はなかったんです。アジア雑貨が好きで、自分で作った雑貨や海外で仕入れた商品を販売する場所としてここを借りました。少し経ち、雑貨を見にきてくださるお客様からここでお

茶をしたいという要望を受け、カフェの経営を始めました。
工場という広さを活かし、大勢の人が集まれるライブや個展などのイベントも行いたいと思い、何でもできる複合施設として営業を始めました。
当初たてた事業目標は、“五感で感じる豊かな生活文化を提案し、にぎわいを創出する事業の発展をめざす。”
カフェ、雑貨販売、イベント、三つの事業を通して訪れる人の五感を刺激し、豊かでゆとりのある空間を作りたいと考えています。

02.リノベーション時のエピソードをお聞かせください。

当時の面影を残すことを第一に考えました。あとは機能性（空調や電気、ガス、水道、ライブをするための音響など）やカフェを営業するため衛生面にも気を配りました。
大家さんからは壁は傷つけないで欲しいという要望だけでした。
大正時代の建物は文化財に登録されているところも多いけど、文化財申請をしてしまうと自由に改装ができないため今後も申請をする予定はありません。
もともと工場という大きい施設だったので、配管が複雑で修繕費はかなりかかりました。

03.そこまでしてここを借りて営業しようと思ったのはなぜですか。

最初は深く考えていませんでした。事業を展開させていくうちに周りから期待されていることや、従業員にとってここが将来やりたいことへの通過点となっていることに気がつきました。たくさんの人と関わっていくうちに、ここ rojica からまちが盛り上がっていけばという

考えに変わっていき、そういう志でやっていると周りも自然と力を貸してくれるようになりました。

04.周りからはどんなサポートがあったのですか。

泉南市が広報的な面で支援をしてくれています。メディアから市の観光局に「まちの魅力的なスポットを取材したい」と問い合わせがあったようで、その際にここ rojica を推薦してくれ、雑誌に掲載されたりテレビで紹介されたりしたこともあります。

市も rojica が大正時代の歴史ある建物だからこそまちの魅力ポイントとして紹介してくれているんだと思います。

05.客層について教えてください。

幅広い年齢層の方が来てくれます。

遠方からのお客様も多く土日は特に大阪市内、神戸、和歌山ナンバーが目立ちます。SNS の影響も大きく、みなさんノスタルジックな雰囲気を求めてドライブがてら訪れてくれます。

06.理想とする空間はありますか。

当初から人との関わりを生み出す空間にしたいという想いがあります。ここで楽しいことを開催しつつ、その相乗効果で利益を生み出していければいいと思っていて、それが店を経営するにおいて一つの成功と言えるのではないかと考えています。

07.今後の目標を教えてください。

目先の目標は、コロナで打撃を受けたのでコロナ前の状態に戻すこと

です。以前は毎月何かしらイベントを行なっていたので少しずつでもその状態に戻したいと考えています。

大きい目標でいうと、外国人のお客様を増やすことです。この辺りだと関西空港が外国人旅行者の入り口となるので、関西空港付近で立ち寄ってもらえる場所、観光スポットとしてここを発展させていきたいと考えています。最終的にはここ rojica を目的の場所として訪れてもらいたいです。

旧中川邸（兵庫県たつの市） 2022.7.14

店主：一般社団法人はりまのこ　山本梨加さん

01.ここはもともとどなたの所有物だったのですか。

“旧中川邸”というだけあって、もともと中川さんという方が住んでおられて、ここは自宅兼医院として使われていました。その後、空き家になったのですが地元の方たちは新しい建物が建ってほしいわけでもなく、自分たちが通っていたところが取り壊されてしまうのも嫌だという思いが強く、空き家として放置されていました。

02.なぜ元医院の建物でカフェを始めようと思ったのですか。

一般社団法人はりまのこは、保育事業を行なっていて、保育園以外で小さい子たちの交流の場を作るとなった時に、カフェという場所が最適だと思いました。

この建物は元産婦人科ということで、女性の診療を行なっていたことから他よりも繋がりが持てた状態で経営できるのではないかと思い、

ここで始めることになりました。

03.リノベーション前と比較して大きく変わったところはありますか。

ここはもともと医院兼住宅でいくつかの部屋が壁で仕切られていました。リノベーション時は大事な柱だけを残し、部屋の壁を取り払うことでここを開かれた空間に改装しました。訪れてくれた人たちが同じ空間を感じ、交流が自然に生まれる場所になればと思っています。

04.リノベーションは大変な費用と労力がかかると思いますが、そこまでしてここでやりたかった理由はありますか。

ここは地元の方達によって守られてきた場所で、このような歴史的建造物は利用されてこそ価値あるものになると思っています。ここをリノベーションするときにクラウドファンディングを行ったのですが、地元の方を中心にたくさんの方々に支援してもらいました。

現在来店される方の中にも、医院の頃に通院されていてその懐かしさを感じに来られる方がいます。そんな方達にとってここが安心できる場所になればと思っています。

売り上げを上げる場所ではなく、地域交流・貢献が目的の場所として、存在していたいです。

05.イベントはどういったものを開催していますか。

小さい子向けのイベントでいうと、座敷があるのでそこでキッズ茶道を開催したり、季節ごとのイベント、七夕会やクリスマス会などを開催したりしています。

ここで働いているスタッフも何かを生み出す一人でいて欲しくて、元

ケーキ屋の人にはイベント時にケーキを焼いてもらったり、太鼓の経験がある人には太鼓の演奏会を開いて参加してもらったりしています。他にもハーブの栽培経験があるスタッフにはハーブを育ててもらい、ハーブを使用した料理をメニューに加えたりしています。
また、ここは昔城下町で、城下町は何かに特化した方が多いんです。そういう方々を招いてワークショップを開くこともあります。

06.ここをどんな空間にしたいですか。

地域の子ども達と繋がれる場所にしたいです。ここが地域の情報提供の場になればと考えています。
あとは人間同士の付き合いが生まれる場所でありたいと思っています。ここは近くに住んでいる 95 歳のおばあちゃんの安否確認ができる場所でもあって、まちの人たちに寄り添い気にかけることもこのお店の役目なんじゃないかと思っています。

07.今後やりたいことはありますか。

一般社団法人はりまのこは保育園も運営しているため、このカフェと保育園で連携して出し物やお楽しみ会を開きたいと思っています。
それだけでなく、旧中川邸が募るイベントを開き、子を持つ親と繋がることでここを通して園を探してもらいたいなと考えています。

嵯峨野湯（京都嵐山） 2022.9.19
店主：田中さん

01.大正時代に建てられた銭湯をリノベーションして現在カフェを営業されていますが、なぜ新しい建物ではなくリノベーションという形をとられたのですか。

古き良きものを、活かし残してゆくことに意味があると考えております。つぶすことは簡単ですが、復元する事はなかなか難しい中、このような素敵な建物に出会えたので、残すべき感じ、また銭湯の時同様にご近所のみなさまに愛され、憩いの場として頂けるようカフェとして営業させて頂いております。

02.元銭湯をカフェとして営業する場所に選んだ理由、きっかけはありますか。

同上となります。 また、元銭湯を、というよりかはご縁がありこちらの建物でカフェをさせて頂いているという感じです。

03.リノベーション前と比較して大きく変わったところがあれば教えてください。

床ははりなおしており、 二階も新たに塗装しております。銭湯のシンボルである煙突は数年後に倒れる恐れがあったため撤去しましたが、お店の約半分は当時のまま残っています。

04.大正時代らしさを強く感じられる場所(壁や家具など)はありますか。また、リノベーション時にここだけは残したいと思った部分はありますか。

タイルや壁はほとんどそのままです。鏡広告などもしているので銭湯感感じて頂けるかと思います。また、タイルは大正時代からのもので、

当時の職人さんが 1 枚 1 枚手作業でタイルをはり、大きな絵を作っています。タイル絵はお客様からも可愛いと言っていただける箇所です。

05.どのような点で他のカフェと差別化を図っていますか。

大正時代からの建物、銭湯を活かしているので、 その空気感を感じて頂ける事が、嵯峨野湯の一番の嬉しい事です。 建物以外にも、お食事お飲物、お土産、スタッフ、含め 嵯峨野湯の空気感を感じて頂き、気に入って頂けることが一番と考えております。

06.現在の客層を教えてください。

20 代～40 代くらいの方、女性がほとんどです。 銭湯に通っていたご近所のおじいちゃんおばあちゃんも来てくださっています。

07.お店がこんな空間になって欲しいという理想はありますか。

ご近所の方の憩いの場を目指しています。空間とは違っていたら申し訳ありません。お店としてはこのように考えております。

08.お店が最も大切にしている想いをお聞かせください。

その時のはやりも大切ですが、この空間を大切により磨いていける様に また少しでも地域貢献、ご近所のみなさまに愛されるよう日々頑張りたいです。

09.建物を通して若者に伝えたいことがあれば教えてください。

昔ながら物にも良い部分が沢山あり、たいせつに磨いていけば素敵になります。

9.制作物　Web サイト

https://clematis12.sakura.ne.jp/taisyo/

10. 今後の展望

取材を通して、どの店も歴史的建造物は使われてこそ価値があるという考えを持ってカフェを営業していることが明確となった。また、カフェでありながら新しい交流が生まれる場、地域住民の憩いの場として居続けたいという思いが強く感じられた。

多くの人に利用されてきた公共施設は当時の面影を残しリノベーションを行うことで地域の人を中心に、唯一無二の場所として愛され続ける。これは長年多くの人に利用され、その跡が残る“施設”にしか出せない強みである。

本研究では誰でも立ち寄りやすいカフェに対象を絞ったが、カフェ以外にも広い施設であるからこそできることはたくさんある。広い空間は多くの人が集まり交流できる最適な場所といえる。しかし、このような広い空間、主に公共施設をリノベーションし活用されている事例はまだまだ少ない。住居であれば、不動産会社に相談することで希望通りの家を探すことはできるが、施設として利用されてきた建物は住居よりも数が少なく、不動産会社によっては扱っていないところもある。実際に本研究で取材を行った店はそこを所有していた大家もしくは市と縁がありリノベーションをし、営業を始めたという。このようなことがない限り、施設を借りたい人と貸したい人は繋がりづらい状況にある。そのため広い場所を探している人と、施設を残したいが新しい活用方法に悩んでいる人を繋ぐプラットフォームを充実させていかなければならない。

また、今回は店主にリノベーション時の話や開業までの経緯を取材し

たが、実際にカフェを利用しているお客さんに取材ができなかった。取材の中でも近隣に住む人がリノベーションを手伝ってくれたり、当時施設を利用していた人が懐かしさに浸るためカフェを利用してくれたりしているという話を聞いた。今回の制作では施設であった当時の話は深く触れられず、残っている壁や天井の写真、店主から聞いた昔の間取りの情報しか得られなかった。当時通っていた人に取材ができていたらより当時のことや細かい間取り、そのまちでその施設はどんな存在であったかを知ることができたはずである。それをもとに当時の建築や文化、まちの特色など多方面からそのカフェを分析でき、Web サイトを通して興味深い情報を発信できただろう。

また今回取り上げた店は地域に貢献したい、地域の人の拠所になってほしいという共通の思いが見つかったが、これをより明確にするためには他にも学校や図書館など公共・公益的施設のリノベーション事例を集めなければならない。

参考文献

総務省[2013]　「公共施設等の解体撤去事業に関する調査結果」　(総務省自治財政局地方債課，平成 25 年 12 月)

渡辺光雄・高阪謙次他[1982]　住宅建築研究所報
「生活様式の研究　－明治末期からの都市居住者の『生活様式』の形成と変化について－」8 巻 337-382

朝日新聞デジタル　「市原俊介　アッパッパ」(更新日 2010.5.18)
http://www.asahi.com/special/kotoba/archive2015/mukashino/2010050700001.html　(アクセス 2022.12.12)

クロス・マーケティング　「カフェ・喫茶店の利用に関する調査（2021年)」(更新日 2021.11.10)
https://www.cross-m.co.jp/report/life/20211110coffeeshop/　(アクセス 2022.12.12)

ここいろ 山口、暮らしの自由帳。　「路線バスで小学生時代へタイムスリップ！廃校の教室で銀色食器の給食をいただきます｜職員室カフェ」(更新日 2020.2.26)
https://coco-iro.jp/?p=5993　(アクセス 2022.7.11)

まゆといと「【珈琲焙煎所 月とゆふづつ】西尾祐諄（にしお ひろし）さん」(更新日 2020.7.16)
https://mayutoito.jp/hitokoto/tsukitoyuuzutsu/　(アクセス 2022.12.9)